

食農保育で育む乳幼児のこころの発達

野村明洋

(東村山市立第八保育園)

A Child's Heart Grows Because a Child Participates in the Activity about Agricultural Work and Traditional Food Culture

NOMURA AKIHIRO

(The Eighth Nursery of the Higashi - Murayama City)

要旨

乳児期から大人との信頼関係の中で豊かな環境と接し、自由を保障される中で自然に触れ、五感を駆使し自然の素材を受け止めることが、人間らしい感性・感情・意欲を系統的に発達させていること、園や地域をも視野に入れた世代間交流を積極的に図り、食農保育を進めることが、乳幼児の全人的な「生きる力」を育てる上で極めて多くの意味を持つことを、これまでの実践の中より報告する。

1. はじめに

東村山市立第八保育園（以下、園）は1997年4月より、東村山市が社会福祉法人に運営を委託した公設民営園である。

園は市街地に隣接しながらも古くからの農村の慣習や伝統行事が現在も息づく地域にあり、背後の丘陵地の麓では野菜や果樹、生花栽培等の近郊農業も盛んで一部では稲作も行なわれている。

2. 食と農の活動経過

園の保育目標は「豊かなこころと丈夫なからだ」である。その「こころ」を育てるということについて、「食農保育」を保育の核に据えてきた。理由は、食と農は生活の基盤であり、それを正面から見据えることでより乳

幼児の子育てに関する様々な問題が見えると考えたからである。

子どもたちが置かれている生活環境は激しく変化し、子どもたちの心身の成長にも影を落とすようになっている。文部科学省も2002年度から完全学校週休5日制を実施し、学習指導要領を10年ぶりに改訂、「総合的な学習の時間」を新たに設置した。知識だけではなく生きる力を育てることを目標としているが、その点では、乳幼児期は学齢期と比しても、子どもたちの活動自体が未だ未分化な状態であり、学齢期以上に「総合的な活動」が重要性を持つと考えられる。

「生きる力を育てる」とは、生活を子どもに返すことに他ならない。子どもが生活の主体とし、生活を営む楽しさを理解できる活動

を構築していく必要がある。食農保育は、それを仲間や周囲の大人と共有できることをねらいとしている。栽培し収穫し食すという一連の活動及びそれらを利用しての伝統食作りを通し、先人たちが自然に働きかけて「いのちの糧」としての作物を得て、人としての食文化を自然の循環の中に築き上げてきた歴史の一端に触れることで、特に5・6歳児においては、体験を通して、食するためには、そこに育むという営み、そして食料としていく多くの作業が存在していることに気付き、加えて、消費者の立場のみで、土から育てるという感覚に乏しく、生産と食との距離が遠くなりがちな子どもたちの生活に変化を与えることを目的としている。

本報告では、1997年4月～2003年3月の活動から、食農活動を通しての子どもたちの自然観、生活観の変化について報告する。

園の食農活動は表1のように、年長児クラスの稲作活動を中心に計画され、毎日の給食食材に加えたり、料理保育に利用している。料理保育の年間計画を表2に示す。

畑はすべて園庭の土作りから行なったものである。現在では図1のようになる。年少～年長児の各クラスの部屋の前にあり子どもたちは畑をいつも身近に感じている。園庭や保育室からも視界の中にいつも畑が自然に入ってくる。よって、子どもたちは一日の生活の流れの中で、子どもたちの好きな時間に畑に関わることが可能になる。

1. ミニ水田作りと保育環境

1997年に作ったミニ田んぼは、2003年現在、幅3m、長さ4mになる。田植えまでは泥のプールとして子どもたちの解放的な空間となり、全身で泥の感触を体感する。「田んぼの中はヌルヌルするけれど気持ちいい」と、最初は抵抗感のある子どもも回を重ねるごとに大胆になっていく。

ミニ田んぼには幅40cmのあぜ道が縦横に作

られ、このことで田んぼの中心部まで入り込み、水田の内側から稲の生長変化等の観察が可能になった。子どもたちは散歩先で採取した水草や小動物を放し成長繁殖させ、毎日の変化を期待し関心を高めていくことができた。

月	0歳組	1～2歳組	3歳組	4歳組	5歳組
4	春の地 野草摘み(ヨモギ等)				
5	園庭の自然	(夏野菜苗植え)			稲苗床作り サトイモ
		ミニトマト キュウリ	ミニトマト キュウリ ナス スイカ	トマト キュウリ ナス ピーマン スイカ	トマト キュウリ ナス ピーマン 枝豆
6	夏の地域の自然	ジャガイモの収穫			
		田植え	代かき・田植え 梅干作り		
7	(夏野菜の収穫)				
8					
9	秋の地域の自然	(冬野菜種まき) カブ	(冬野菜種まき) 大根	(冬野菜種まき) 大根 ニンジン	(冬野菜種まき) 大根 ニンジン ゴボウ ブロッコリー
		稲刈り			
10	サツマイモ掘り				
11	冬の地域の自然	干し柿作り			
12	1 2 3	(冬野菜収穫)			
1		味噌の仕込			
2		ジャガイモ植え付け			

表1 年間を通しての食農保育活動

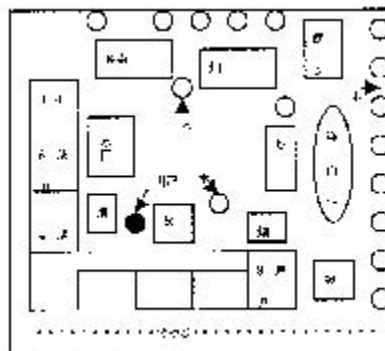


図1 食農保育を意識した園庭環境

月	2歳	3歳	4歳	5歳
4		草もちづくり	草もちづくり	草もちづくり
5	焼き魚の会	焼き魚の会	焼き魚の会	焼き魚の会
6		ホットケーキ	ジャガイモ料理	ジャガイモ料理 梅干作り
7				
8				
9	お団子づくり	お団子づくり	カレーづくり 月見団子づくり	月見団子づくり
10	焼き魚の会	焼き魚の会	焼き魚の会	焼き魚の会
11	芋煮会・焼き芋	芋煮会・焼き芋	芋煮会・焼き芋	芋煮会・焼き芋
12	クッキーづくり	クッキーづくり おにぎりの会 鏡餅作り	クッキーづくり おにぎりの会 鏡餅作り	クッキーづくり おにぎりの会 鏡餅作り
1				
2		ドーナツづくり	クッキーづくり 味噌づくり	クッキーづくり
3	クッキーづくり		カレーづくり	カレーづくり

表2 料理保育計画(2002)

当初は苗は農家より分けて貰っていたが、いのちをつなぐということ子どもたちと考えるために、2001年からは前年度収穫したもののから種籾を取り分け苗を育てている。先代から託された大半の子どもはその意味を感覚として理解する。異年齢でのつながりが深かった代ほど思いは強いようである。

種籾を塩水選別する段階では、沈んだ種籾と浮いた種籾の差別化で子どもたちに葛藤が生じる。浮き沈みが軽重の差で養分量の差であることは年長児も気付くが、沈んだ種籾と分けられる事実に、「かわいそう」「一緒にしてあげたい」と声があがる。不適だからと除外はできない。なぜ一緒にできないのかを子どもたちと一緒に考えていく。そこからそれぞれに合った役割があることに気付いて貰えるように保育者も配慮する。浮いた種籾は観賞用としての役割を与えられることもある。

これは人の生き方を考えることにつながる。一緒にあれば良いわけではなく、それぞれの持つ能力が生かされ、最大限その役割を担うことが大切であることに気付いていく土台となる。

田植えでは、大切な苗を踏まないように注意し丁寧に植えている姿に、種籾から育てた苗を大切にしようとする心が伝わる。台風の際に、倒れた稲を起こそうと必死になる子の姿も見られた。

刈り取りは年少から年長児で行なう。年中、年長児は鎌を使い取り扱いに不慣れな子には保育者が一対一でつく。年長児の大半は自力でできる。刈り取りから干すまでの一連の作業の中心は年長児が率先して行なう。稲を集める、紐を切る、束ねる、干すと役割分担まで自分たちで行う。

脱穀は年長児が指先でしごいて籾をとり、籾摺りは試行錯誤の結果、臼に籾を入れ杵でこすり、ドライヤーの冷風で籾殻やゴミを飛ばす方法をとっている。手間のかかる作業だが、細かい作業も年長児なりの発見や驚きを持って集中して取り組んでいる。

仕上がった玄米を精米する段階では、色の变化、温かさ、匂い等を五感で感じ食への期待が子どもたちから感じられる。収量は例年白米にして5kg程度である。食べる段階では、子どもたちが米を研ぎ、かまどで炊き上げる。吹き上がってくる様子、音、匂いに「お米が生きている」とつぶやく子の姿も例年見られる。

一年近くかかる稲作活動を通じ、稲を中心としたミニ水田の自然環境の変化に触れることで、そこに生まれ育つ命を実感し「食べること=命をいただくこと」ということを体感するとともに、年長児として経験や考え、感動したことや想いを伝え合い、協力し合う力が培われていることが一連の作業から伺えた。このことは3・4歳児時期の活動の成果を予測し表象したことが実現するように祈り合い、

成果を喜び合う姿がさらに成長した姿として現れたものとする。また、3～5歳児での各々の食農活動が、認識・操作面の系統的な発達につながることも推察された。子どもたちは農という自然への働きかけから、素材の価値に気付き、その果実を味わい自らの欲求も満足させている。そして、様々な角度からものを見つめ、集中しものを吟味し、分析し、活動の結果を予測し表象する力や、目と手の協応性、巧緻性、道具を駆使する力を培っている。

2. 食から広がる世代間交流

地域の中での交流

近隣農家との交流は栽培方法の意味や技術、病虫害対策、料理方法を学ぶ良い機会となる。

0～1歳では散歩先での自然体験を通し五感で感じることに大切にしている。野菜等が畑に実っているすがたを見せ収穫し味、季節の香り・変化を子どもに伝えながら、自然そのものを味わうという人本来の姿を子どもたちの中に見出している。0歳児クラスの担任は、「子どもたちは店先に並んでいる物より、畑にある作物や木になっている実を見つけると、『まんま』と言って食べたがる」と報告している。担任は、そうした子どもたちの姿を『0歳児なりに自然に触れ親しむ』から『0歳児だから全身で自然を感じる』ととらえている。1歳児の担任は、散歩先での子どもたちとの自然の中での食の活動が、感情表現に変化を与え、同じ物を食す一体感が、子どもと保育者の間にあたたかい信頼関係を作ると報告している。乳児クラスの実践からは、乳児期から大人との信頼関係の中で豊かな環境と出会い、自由を保障される中で自然に触れ、五感という自然力を駆使し自然の素材を受け止めることが、人間らしい感性・感情・意欲を系統的に発達させていることが伺える。

園では1999年から干し柿作りを行なっている。材料の柿は近隣の農家の庭で採らせて頂いている。柿を採る間や出来た干し柿を届ける時の農家の方との触れ合いが子どもたちを喜ばせる。干し柿を届けるようになり、その農家でも干し柿を作るようになったことは、園における取組みがソーシャル・リフォームの一つとして影響していることを示唆する。

世代間の交流

園の職員構成の割合を図2に示す。バランスのとれた職員の年齢構成の特徴を生かし、食農の活動で70代を筆頭に、各世代が子どもと一緒に活動し、3世代、4世代の交流を積極的に進めてきた。

梅干作りでは、梅をかじった後塩を舐めると甘いことに子どもたちは気付く。なんで甘いのかを訊ねる子どもに年長者の職員は「不思議でしょう」と微笑む。梅と赤じそを漬け込み、梅がきれいに染まったのを見て、食べたがる子に陽に干すとさらにおいしくなることを伝える。知識を教えるのでなく不思議さを共有する。毎年50kgの量を梅干にするが、子どもたちは良く食べる。園の梅干しを食べるようになって、市販の梅干を食べなくなったという報告を親から受けるようにもなった。干し柿作りの渋い柿を干すと甘くなることと同様に、自然のおもしろさや不思議さは勿論のこと、そうすることの大切さを伝えてくれた年長者の知恵や技術はすごいと素直に子どもたちは尊敬の念を抱く。

具体的な事実、現実に直接触れ、年長者が若い世代に、若い世代が子どもに伝え一緒に活動し心を通わせる楽しさが感じられる。

干し柿作りで柿が変化する様を「しわしわになった」「おばあちゃんの顔みたい」等と表現し、色の変化を発見する子どもに大人が気付かされることもあり、双方向の関わり合いが世代間をつなげる可能性も感じている。食農保育を通し、年長者は、若い世代が具体

的な事実・現実に関わり、能動的に技能や方法を学び、具体的な場面に実際に適用させ身につけていこうとする姿に喜びを感じ、若い世代は代々受け継がれてきた知恵に触れ、表面的にはバラバラのものとして捉えていた食農文化が、地域の自然や人の暮らしの奥深いところでつながっていることに気付く。

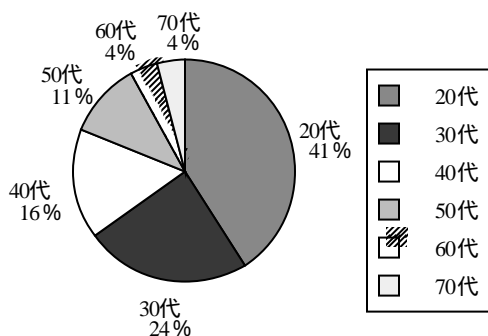


図2 職員年齢分布（2003）

核家族化が著しい現代社会で、家庭での日常的な世代間の関わりは減少傾向にあるが、園での世代間の関わり合いの様子からは、子どもたちが、親・祖父母の世代、その上の世代と一緒に考え役割を持ち物をつくり、遊び、畑の活動をすることが、失われつつある幼児期の世代間の交流による「原体験、原風景」を作る大きな要素になるのではないかと推察される。

3. 考察と展望

人は自然と関わり、自然から主体的に学び、食を文化として自然の中に位置づけてきた。それら先人たちのすぐれた知恵は直接的な経験からのものであり、知識として詰め込まれたものではない。それらの知恵は世代間にお

ける愛情深く信頼に満ちた相互的な関わりの中で伝えられていくものである。

現代社会において、世代ごとの孤立が問題とされ、子どもたちの危機が叫ばれているが、こうした時代にこそ、乳幼児期から直接的経験から得る知恵を重視するべきである。

園だけではなく地域をも視野に入れた上での世代間交流を積極的に図り、食農保育を進めてきたことが、乳幼児の全人的な「生きる力」を育てる上で極めて多くの意味を持つことが、これまでの報告で示唆された。地域には日々の暮らしや農作業を通じて育まれてきた人と自然、人と人との深い交わりを中心とした生活文化の積み重ねが存在する。園で土を耕し、様々な作物を育て、梅干や味噌などの伝統食作りに取り組むのも、子どもたちに土地の生活文化に触れる機会を多く持たせたいという思いからである。どんなに良い自然環境があっても、そこに働きかけ生活の中に取り込んでいこうという思いがなければ何の意味も成さない。人と風土は表裏一体で、土地の風土が人を育て、人が土地の風土をつくるといわれる。地域で生まれ育つ子どもたちと生活を共にする生活者として、地域や地域に暮らす人たちを知ることを大切に考えながら、開かれた関係の中で、さらに食農保育を展開していきたい。

（参考文献）

- 野村 明洋「幼児の稲作活動と食文化」『日本保育学会第53回大会発表論文集』2000
- 野村 明洋「世代間で広がる食文化活動」『日本保育学会第54回大会発表論文集』2001